浜松市におけるブラジル市民のメンタルヘルス
—2009年度調査の結果とその後の展開—
池上重弘（静岡文化芸術大学）

0 本報告の目的
2009年度の浜松市外国人メンタルヘルス実態調査の結果を報告し、社会経済的背景に焦点をあてた分析。調査結果を踏まえた新たな施策展開の意義を検証。

1 調査の目的と特色
(1) 目的
2008年後半以降の経済状況悪化に伴うブラジル市民のメンタルヘルスの実態把握。
総合的自殺対策推進のための基礎資料として活用。
浜松市精神保健福祉センターより受託して報告者ら7名のチームで実施。
(2) 特色
ブラジル人集住都市での経済危機後のメンタルヘルスに焦点を当てた大規模調査。
アンケート調査と個別面接調査を実施。量的データと質的データの両方を分析。

2 調査対象と方法
(1) 質問紙調査
浜松市に外国人登録をしている16歳以上のブラジル人男女のうちから無作為抽出された5,000人。
2009年12月に無記名式の郵送法で実施。ポルトガル語版とルビ振り日本語版。
(2) 個別面接調査
質問紙調査で個別面接調査に同意した方のうち26名。2010年1〜2月実施。半構造化面接法。

2 調査結果
2-1 質問紙調査
(1) 回収率 17.6%（未達を除く4,058件中の721件）
(2) 性別 男性378人(52%)、女性343人(48%)
(3) 年代 40代が最も多く216人(30%)、次に、30代196人(27%)
(4) 地域団体・活動への参加
半数近くが宗教団体の活動に参加。次いで、学校の保護者会、地域の行事、母国語会で開催する行事に4割近くが参加。
(5) 就労状況
間接雇用(派遣・請負)が最も多く37%、次いで直接雇用(正社員)が18%、無職(求職中)が17%、直接雇用(パート)が11%。
(6) 健康状態
「普通」との回答が最も多く45%、「とても良い」「まあ良い」は43%。
2年前との比較では、「同じくらい」との回答が最も多く69%、「悪くなった」との回答は17%。
(7) 抑うつ状態
抑うつ状態（CES-D16点以上）にある人は約3割。
抑うつ得点が高い群
・女性 > 男性  20代以下 > 30代・40代  無職(求職中) > 他群
(8)この1年の悩みやストレスの有無
「よくあった」19％、「たまにあった」42％。
その内容は、経済問題が最も多く69％、次いで家庭問題が43％、勤務問題が41％。

(9)相談相手
誰もいない5.7％、相談相手あり94.3％（親族76.8％、知人46.6％、外部機関18.5％）

(10)自殺に関すること
「来日してから自殺しようと思ったことがありますか」と問う「自殺意図あり」8.6％
その理由としては、人間関係、家族関係での悩みが多かった。

2-2 個別面接調査（裏面の4事例を参照）
労働環境と言語や文化的違いによるストレス、経済的な問題による家族関係の悪化、医療受診の問題などが語られた。自殺意図者が自殺を考えるように至った要因は複数であり、自殺を考えたことのある人も日常生活で何らかのストレスを感じていた。そこから母語による心理的支援、コミュニティ全般に向けての啓発の必要性が示唆された。

3 考察
経済危機下での失業や収入減少にかかわるものの、複合的な要因により精神的・的なストレスを負っている人の存在が明らかになった。同様の事例地からこそ、ネットワークがうまく機能しない場合の孤立感が強まる構図も指摘できる。また、これらはブラジルの帰国をこころの動り所とした日本の初等教育における傾向もあったが、本当に帰国するか否かの決断に直面すると、帰国という選択肢を選ぶのは現実的には困難な場合もあり、これまで以上に孤立感や絶望感を感じている状況も認められた。2008年度の浜松市住居の日本人市民調査では過去1年間の自殺意図が8.7％だったが、来日以来」との時間の設定が異なるものの、ブラジル人調査でも8.6％と日本人調査とはほぼ同様の結果となった点は、自殺予防という観点から注目に値する。

4 その後の展開—浜松市在住外国人メンタルヘルス相談支援事業—
2010年7月、全国の自治体で初めて、浜松市文化共生センター内に「外国人メンタルヘルス相談窓口」を常設で開設。精神保健福祉分野の専門性を有し、ポルトガル語で相談可能なカウンセラーや配置。

2010年度の相談実績は実件数697件（月平均77.4件）であり、当初の想定（月平均48件）を大きく上回った。また、医療機関、発達相談支援センター等の相談機関、小中学校、外国人学校など教育機関との連携が必要なケースが見受けられたため、2011年4月から相談員を1名増員して2体制。

継続相談が50％。就業者37％、学生22％（学校への出席相談を実施したため）、無職18％。無職者の相談は開設当初に比べると減少していたが、東日本大震災以降また増加。子どものこと、学校のことの相談が多いが、背景には夫婦間など家庭環境や子育ての困難さといった要因が認められる。

教育機関、専門相談機関、医療機関等との連携が必要な場合が多い。精神科未受診の相談は89％と大半を占める。

経済危機の影響が一段落したようにも思われるが、3月の震災の影響で雇用環境が不安定になっている上、放射能への不安を募らせている外国人も少なくな。市外からの相談も41％に及んでいることも考え合わせると、今後は各地でこうしたメンタルヘルスへの対応が求められる。
事例 I 40代後半 女性 非日系人

友達から借金をして来日 ↓ ことばの壁
家族の病気 ↓ 職場でのいじめ ↓ 知人にだまされる
不景気により夫がリストラ ↓ 肺炎・糖尿病・がん・うつ病・指の怪我
お金がなく受診できない・生活苦 ↓ 絶望感・孤独感・無気力・寂しさ・感情面でボロボロになる
自殺を考えるようになる ➞ 帰国を決意、教会へ通う

事例 II 40代前半 女性 日系人

13歳で来日、ことばの壁 ← 祖母に支えられる
祖母が亡くなり、父が借金を残して出て行く
14歳で働き始める ↓ 結婚、夫からのDV、夫の不倫、流産
生活苦・疲労 ↓ 自殺未遂
自殺未遂 ↓ 離婚、再婚
不景気でリストラ ↓ 子どものいじめ
今後の生活に不安 ➞ 仲間との交友
夫婦関係の好転
事例 Ⅲ 50代前半 男性 日系人
ブラジルでは、日系人居住地のある地域に住んでいた。
自宅では日本語、外では、ポルトガル語を使用

92年に結婚後すぐに、家族で来日
車両部品メーカーで働く

09年1月末に解雇され、失業
交友関係は狭い
家計の悩み・ストレス
地域で「外人」として扱われる

夫婦間の緊張、不眠、絶望、欲求不満、不安感

夫婦間、子どもとのトラブル
自殺を考えるようになる

事例 Ⅳ 40代後半 男性 非日系人
ブラジルでの暮らしならは、経済的に追い詰められた状態だった。
子どもの頃、いじめに遭った。兄弟は何度か自殺を図り、自殺で亡くなった。
薬物使用歴あり。ブラジルでも自殺未遂したことがある。

90年に家族で来日
健康面での障害

職場での差別
仕事を転々とする

不景気により、収入が減る
妻が家計を支える

社会恐怖症、希望を見出せない
将来についても見通しがない

精神面が不安定になる
夫婦喧嘩で妻へ暴力
ひきこもり

酒を飲み、自殺未遂